

「様態・付帯状況」の複合動詞の組み合わせ

何 志 明

1 はじめに

複合動詞の中で、どのような動詞が前項動詞（以下、V1）になり、どのような動詞が後項動詞（以下、V2）になるか、を判断するのは容易であるとは言えない。（以下、*印は明らかに不自然な文や語を、?印はやや不自然と思われる文、??印はかなり不自然と思われる文を表わす。）

- (1)(i) 織原容疑者は、遺体発見現場近くのリゾートマンションに部屋を所有していたが、普段はこのマンションにほとんど出入りしていなかった。しかし、昨年7月上旬、マンション近くの海岸でスコップを持ち歩く姿が目撃されていたことが判明している。
(遺体発見：遺体はルーシー・ブラックマンさんか 身元確認急ぐ 2001.02.09 日付)
- (ii) 環境省によると、自治体に引き取られるネコは、年間27万6000匹(99年)とイヌの約2倍。一因と考えられるのが屋外を歩き回る飼いネコによる繁殖だ。
(ペット：ネコの飼育は室内で 環境省が基準改正へ 2002.02.02 日付)
- (iii) わざわざ130円を払って駅の入場券を買い、広場を見渡せる総武線のホームに駆け上がる人も出た。
(都議選：首相が応援で奔走“ナマ小泉” 見たさの群衆で大混雑 2001.06.17 日付)
- (iv) 同町では24日にもカズハゴンドウ二十数頭が打ち上げられ、この時はクジラを軽トラックなどで持ち去る人もいたという。
(クジラ：茨城県・波崎町で85頭漂着 53頭は死亡 2002.02.25 日付)

(1)の「持ち歩く、歩き回る、駆け上がる、持ち去る」のようなものは、影山(1999)、松本(1998)、Matsumoto(1996)においては、V1が表わす出来事がV2が表わす出来事の「様態あるいは付帯状況」を示すとし、「様態・付帯状況」の複合動詞と呼んでいる。例えば、(1)(i)の「持ち歩く」は、「容疑者が歩く時の様態または付帯状況とはスコップ

を持つということである」という意味を示す。(1)(ii)の「歩き回る」は、「飼いネコが(屋外を)回る時の様態または付帯状況とは歩くということである」という意味を示す。しかし、例えば、「花子が泣く時の様態または付帯状況とは別れた恋人との思い出を語るということである」というのは(2)(i)の「語り泣く」、「花子がラブレターを焼く時の様態または付帯状況とは泣くということである」というのが(2)(ii)の「泣き焼く」で表現できるかということ、実際には「語り泣く」も「泣き焼く」も不適切な組み合わせである。

(2)(i) *花子が昔別れた恋人との思い出を語り泣いた。

(ii) *花子が別れた恋人からもらったラブレターを泣き焼いた。

(1)は「様態・付帯状況」の複合動詞として適切であると認められるが、(2)はそうではない。(1)の組み合わせも(2)の組み合わせも「動詞+動詞(V+V)」の形をしているが、どのような複合動詞が「様態・付帯状況」の複合動詞に属するか、言い換えれば、「様態・付帯状況」の複合動詞に属するものと属さないものをどのような基準で区別するかは大きな課題となる。「様態・付帯状況」の複合動詞に関しては、次の(3)の疑問がある。

(3)(i) どのような特徴の動詞がV1になり、どのような特徴の動詞がV2になるか。

(ii) どのような特徴のV1とV2における「V1+V2」の組み合わせが適切であるか。

ところが、先行研究では(4)の複合動詞を「様態・付帯状況」の複合動詞に分類する理由については詳しく言及されていない。そこで、(3)の疑問の答えを明確にするため、本稿は、「様態・付帯状況」の複合動詞を取り上げ、考察する。考察の対象とするものには(4)のような組み合わせが考えられる。

(4) 遊び暮らす、歩き回る、浮き上がる、歌い歩く、駆け上がる、駆け下りる、駆け回る、語り明かす、転がり落ちる、探し回る、忍び寄る、滑り落ちる、滑り降りる、尋ね歩く、連れ歩く、連れ去る、飛び上がる、飛び出る、飛び回る、眺め暮らす、流れ落ちる、流れ出る、飲み明かす、飲み歩く、這い出る、這い登る、運び上がる、運び降りる、運び去る、運び回る、跳ね返る、吹き回る、舞い上がる、舞い落ちる、持ち歩く、持ち帰る、持ち去る、持ち寄る、呼び回る、…

2 先行研究

「様態・付帯状況」の複合動詞におけるV1とV2については、次のような指摘がある。

(5)(a) 松本 (1998: 53-54) では、「様態・付帯状況」の複合動詞について、次のように指摘している。

(i) 意志的+意志的：駆け登る、駆け降りる、舞い降りる、滑り降りる、…

(ii) 意志的+中立的：駆け上がる、飛び上がる、飛び出る、這い出る、歩き回る、…

(iii) 非意志的+非意志的：流れ落ちる、舞い落ちる、滑り落ちる、…

(iv) 非意志的+中立的：流れ出る、浮き上がる、舞い上がる、吹き回る、…

これらの動詞では、前項が表わす状況が、後項で表わされている移動の様態であると同時に原因でもある。このような場合、(a)(i)～(a)(iv)の組み合わせは許されるが、「*駆け落ちる」などのような「意志的+非意志的」及び「*浮き登る」などのような「非意志的+意志的」組み合わせは許されない。ただし、「酔っぱらい歩く、乱れ騒ぐ、泣き崩れる、笑い転げる」などのような原因ではない様態・付帯状況の場合、このような制約が成立する理由はない。

(b) 由本 (1996: 109) では、「様態・付帯状況」の複合動詞に関して、「*驚き泣く、*(絵を) 売り暮らす(cf. 眺め暮らす)、*跳び落ちる(cf. ころげ落ちる)、*そびえ上がる(cf. 浮かび上がる)、*(敵を) 倒し進む」のように付帯状況としての解釈が困難なアスペクト素性(punctual や stative)の組み合わせが容認されにくい、と指摘している。

ところが、松本 (1998: 54) では、由本 (1996) に対し、次のように指摘している。

「*売り暮らす」などのような組み合わせ(punctual と durative の組み合わせ)は確かに少ないが、実際には「売り歩く、教え歩く、買い回る」のようなものが存在する。ここで注目すべきことは、前項動詞で表わされた動作が繰り返し起こり、その繰り返しが、後項動詞で表わされた移動の全体にわたって行なわれるということである。

(c) 松本 (1998: 55) では、「時間的共起性の条件」は、様態・付帯状況を表わす動詞の意味に課せられた一般的条件であると考えられる、としている。時間的共起性の条件とは、様態・付帯状況を含む動詞においては、様態・付帯状況が主要な出来事と同じ期間に継続するものでなければならない、ということである。

確かに、「押し開ける、切り倒す、殴り殺す」などのような複合動詞の V2 も、「蹴飛ばす」などのような複合動詞の V1 も、「勝ち取る、受け取る、踏み殺す」などのような複合動詞の V1 も V2 も継続性を持っていないため、これらの複合動詞は「様態・付帯状況」の複合動詞として認められない。しかし、次のような問題がある。

- (6)(i) 「他動詞＋他動詞」: 焼き払う、焼き切る、切り刻む、切り払う、吸い上げる、…
- (ii) 山火事は国立公園局が4日、低木を焼き払う目的でつけた火が強風に乗って広がった。米議会などからは同局の責任を問う声が出始めている。
(山火事: 強風にあおられ被害さらに拡大 米・ロスアラモス 2000.05.12 日付)
- (iii) 警視庁赤羽署や東京消防庁によると、タンクには底から数十センチの高さまで塩酸が入り、山崎さんはホースで塩酸を吸い上げるためタンクに上がったところ、タンクの天井部分とともに落下した。
(労災: 塩酸タンクに転落 1人死亡5人やけど 東京都北区 2002.04.27 日付)

(6)のような複合動詞のV1とV2が表わす出来事は同じ期間に継続するように見えるが、これらの組み合わせは「様態・付帯状況」の複合動詞として認めがたい。むしろ、(6)のような複合動詞は、「焼くことによって払う」(焼き払う)や「焼くことによって切る」(焼き切る)や「吸うことによって上げる」(吸い上げる)などのような、V1が表わす出来事がV2が表わす出来事の「手段」を示す、いわゆる、「手段」の複合動詞と呼ばれるものとして考えられる。「様態・付帯状況」の複合動詞に見える理由は、おそらく「V1が表わす出来事によってV2が表わす出来事」の繰り返し(例えば、「焼き切る」の場合、[焼く→切る]→[焼く→切る]→[焼く→切る]…)ということだからなのではないだろうか。従って、V1が表わす出来事とV2が表わす出来事は同じ期間に継続するよう見えても、実際には「様態・付帯状況」の複合動詞として認められにくいものがある。次に、(7)と(8)を見てみよう。

- (7)(i) 「非能格自動詞＋非能格自動詞」: *歩き帰る、*走り帰る、*帰り歩く、
*帰り走る、*歩き戻る、*走り戻る、*戻り歩く、*戻り走る、…
- (ii) 「他動詞＋非能格自動詞」: *語り泣く、*しゃべり泣く、*焼き泣く、
*塗り泣く、*焼き立つ、*焼き座る、*塗り立つ、*塗り座る、…
- (iii) 「非能格自動詞＋他動詞」: *泣き焼く、*泣き塗る、*立ち焼く、*座り焼く、
*立ち塗る、*座り塗る、…
- (8) *太郎が家に歩き帰った／走り帰った。
*太郎が肉を焼き立った／焼き座った。
*太郎が壁を立ち塗った／座り塗った。

(7)と(8)のような組み合わせは明らかに不自然であるが、全部「意志的＋意志的」であり、(5)(a)の基準を満たしているにもかかわらず、(7)、(8)のような組み合わせは存在せず、「様態・付帯状況」の複合動詞ではない。確かに、先行研究で言及されている(5)(c)のような「時間的共起性の条件」は「様態・付帯状況」の複合動詞を判断するのに必要な条件だと言える。しかし、(5)における先行研究の基準だけでは全体的

に不十分であり、不適切な組み合わせを適切にしてしまう場合がある。認められる組み合わせと認められない組み合わせを区別する基準の問題がまだ明確にされていないゆえに、複合動詞の構成要素をめぐって(3)のような疑問が生じると考えられる。V1、V2が非能格自動詞または他動詞のような意志動詞同士であっても、あるいはV1もV2も非対格自動詞のような非意志動詞同士であっても、動詞が持つ意味的な特徴(例えば、動作を表わすか変化を表わすか)によって適切な複合動詞として認められる場合も認められない場合もある。従って、V1とV2になる動詞の選出基準は、どのような意味的な特徴を持つのか、という点に焦点を絞った方が有効であると考えられる。このようなことから、本稿では動詞が持つ意味的な特徴に着目し、考察を進めていく。そして、「時間的共起性の条件」において、「様態・付帯状況」を示すV1と主要な出来事を示すV2と同じ期間に継続するという条件の中にあるV1、V2がどのような意味的な特徴を持つのか、を検討する。

3 動詞が持つ意味的な特徴

本節では、動詞が持つ意味的な特徴という側面から動詞を検討する影山(1999、2001)、松本(1997)を利用し、動詞の意味を適確に把握した上で、「様態・付帯状況」の複合動詞のV1とV2について考える。影山(1999、2001)では、各動詞は互いに無関係な意味構造を持つのではなく、移動や状態変化や活動などといった共通の意味を持つとし、それらは(9)の状態動詞、変化動詞、移動動詞、活動動詞及び使役動詞のような幾つかのグループに分類されている。

- (9)(a) 状態動詞：物や人における物理的な位置ないし抽象的な状態を表わす動詞
例：ある、いる、(英語が)できる、...
- (b)(i) 変化動詞：ある位置／状態に達することを表わす動詞
例：育つ、弱る、...
- (ii) 移動動詞：時間の推移とともに物体が位置を変えていくことを表わす動詞
例：上がる、回る、歩く、走る、転がる、泳ぐ、飛ぶ、流れる、...
- (c) 活動動詞：何らかの結果状態や位置の変化を伴わない行為を表わす動詞
例：働く、遊ぶ、笑う、叫ぶ、踊る、押す、叩く、蹴る、...
- (d) 使役動詞：外的な誘因が対象の変化を引き起こすことを表わす動詞
 - (1) 位置変化を表わす使役動詞
例：置く、入れる、注ぐ、掛ける、...
 - (2) 状態変化を表わす使役動詞
例：殺す、壊す、温める、冷やす、...

松本(1997)では、(9)(b)(ii)の移動動詞を次のように分類をしている。

- (一) 方向性を包入した動詞：方向性、すなわち一般に方向関係(TOWARD、AWAY FROM)と基準位置(天上、地下、話者の位置など)を表わす移動動詞
例：登る、下る、上がる、下がる、降りる、落ちる、沈む、戻る、帰る、…
- (二) 経路位置関係を包入した動詞：経路、すなわち移動の開始地点から終了地点まで移動物が通る地点のすべて結んだものの位置関係を表わす移動動詞
例：越える、渡る、通る、過ぎる、抜ける、曲がる、くぐる、回る、巡る、寄る、入る、出る、至る、去る、離れる、…
- (三) 移動の様態を表わす動詞：移動の様態、すなわち移動に伴う手足の動き、速度、手段(乗り物など)のように、移動と直接的に関わる付随的要素を表わす動詞
例：歩く、走る、駆ける、滑る、転がる、跳ねる、舞う、飛ぶ、流れる、…

次節では、「様態・付帯状況」の複合動詞におけるV1とV2になる動詞は(9)の動詞が持つ意味的な特徴及びそのアスペクト性とどのように関係するのかを検討する。

4 V1、V2 になれる動詞が持つ特徴

4.1 「様態・付帯状況」の複合動詞として適切な組み合わせ

「様態・付帯状況」の複合動詞のV1とV2との役割は次のように考えられる。V2が表わす出来事の発生している間にV1が表わす出来事も同時に発生している。アスペクトの観点から見ると、まず、動作を表わす動詞がV1とV2になれると考えられる。例えば、「歩き回る」を見てみよう。(1)(ii)の「(ネコが)歩き回る」の場合、ネコが「回る」という動作が発生している間、「歩く」という動作も同時に発生している。「歩く、回る」のような動詞が「シテイル」の形を取る時、動作の進行を意味する。(9)の動詞が持つ意味的な特徴を用い、V1もV2も動作を表わす動詞である「様態・付帯状況」の複合動詞は(10)のようなものがある。

- (10) V1もV2も動作を表わす動詞：
経路位置関係を包入した移動動詞＋経路位置関係を包入した移動動詞
例：通り抜ける、くぐり抜ける、巡り回る、…
移動の様態を表わす移動動詞＋(非直示的)方向性を包入した移動動詞^準
例：舞い上がる、駆け上がる、這い上がる、飛び上がる、跳ね上がる、駆け登る、駆け下りる、飛び降りる、滑り降りる、舞い降りる、…
移動の様態を表わす移動動詞＋経路位置関係を包入した移動動詞

例：転がり回る、歩き回る、走り回る、駆け回る、這い回る、飛び回る、
跳ね回る、泳ぎ回る、駆け巡る、駆け抜ける、...

移動の様態を表わす移動動詞＋移動の様態を表わす移動動詞

例：流れ歩く、...

移動の付帯状況を表わす活動動詞＋経路位置関係を包入した移動動詞

例：忍び寄る、言い寄る、探し回る、呼び回る、歌い回る、持ち寄る、...

移動の付帯状況を表わす活動動詞＋移動の様態を表わす移動動詞

例：持ち歩く、連れ歩く、飲み歩く、尋ね歩く、...

経路位置関係を包入した移動動詞＋活動動詞

例：寄りすがる、寄り添う、...

移動の様態を表わす移動動詞＋活動動詞

例：逃げ惑う、飛び乗る、...

活動動詞＋活動動詞

例：遊び暮らす、泣き暮らす、付き添う、付きまとう、(仏を)伏し拝む、
待ち暮らす、すすり泣く、語り明かす、見習う、見守る、...

ところが、すべての「様態・付帯状況」の複合動詞における V1 と V2 になる動詞同士が「シテイル」の形を取る時、動作の進行を意味するわけではない。

- (11) 神奈川県警は 24 日、交番で受け取った被害届を自宅に持ち帰るなどして、
処理せずに放置していた旭署地域課の巡査長(46)を停職 6 カ月の懲戒処分
にした。

(神奈川県警処：被害届を放置の巡査長に停職 6 カ月 2002.01.24 日付)

- (12) ただ、スイカについては出荷が早まっており、千葉県など関東産はほぼ出
尽くし、今後出回るのは玉の小さいものになる可能性が高いという。

(猛暑：野菜、果物の入荷が減り始める 東京の大田市場 2001.07.21 日付)

例えば、「(被害届を自宅に)持ち帰る、(スイカが)出回る」を見てみよう。「(被害届を自宅に)持ち帰る」の場合、自宅に到着するまでの期間ずっと被害届を持っているということを意味する。「(スイカが)出回る」の場合、スイカが生産者から出荷された(出た)後、市場を回るということを示す。言い換えれば、スイカが市場を出た(出ている)状態が継続していると同時に、スイカが市場を回る。「シテイル」の形を取る時、「帰る、出る」は動作の進行を意味するわけではない。「自宅に帰っている」というのは、自宅に到着して自宅にいる状態、「自宅を出ている」というのは、自宅を離れて自宅以外のところにいる移動の結果変化状態を意味する。(9)の動詞が持つ意味的な特徴を用い、動作を表わす動詞と変化を表わす動詞との組み合わせである「様態・付帯状況」の複合動詞は(13)のようなものがある。

- (13)(i) 「V1 + V2」が「動作を表わす動詞＋変化を表わす動詞」の組み合わせ：
 移動の様態を表わす移動動詞＋(非直示的) 方向性を包入した移動動詞
 例：滑り落ちる、転がり落ちる、流れ落ちる、舞い落ちる、駆け戻る、…
 移動の様態を表わす移動動詞＋経路位置関係を包入した移動動詞
 例：流れ出る、転がり出る、走り去る、飛び去る、飛び越える、…
 移動の付帯状況を表わす活動動詞＋(非直示的) 方向性を包入した移動動詞
 例：持ち帰る、連れ帰る、…
 移動の付帯状況を表わす活動動詞＋経路位置関係を包入した移動動詞
 例：持ち去る、連れ去る、…
- (ii) 「V1 + V2」が「変化を表わす動詞＋動作を表わす動詞」の組み合わせ：
 経路位置関係を包入した移動動詞＋経路位置関係を包入した移動動詞
 例：(スイカが) 出回る、…
 経路位置関係を包入した移動動詞＋移動の様態を表わす移動動詞
 例：出歩く、…
 経路位置関係を包入した移動動詞＋活動動詞
 例：(客を) 出迎える、…

さらに、(14)のようなアスペクト性を持っていない単なる状態を表わす動詞がV1になる組み合わせも存在する。

- (14) (アスペクト性を持っていない) 状態動詞＋活動動詞：
 例：居座る、居並ぶ、居残る、…

以上の組み合わせにおけるV1とV2をまとめると、「様態・付帯状況」の複合動詞におけるV1になれる動詞及びV2になれる動詞は次の(15)のような特徴がある。

- (15) V1：活動動詞、経路位置関係を包入した動詞、移動の様態を表わす動詞、状態動詞
 V2：活動動詞、(非直示的) 方向性を包入した移動動詞、経路位置関係を包入した動詞、移動の様態を表わす動詞

(15)の動詞の中で、「様態・付帯状況」の複合動詞におけるV1、V2になる動詞は、動作を表わす動詞と変化を表わす動詞とどのように関係するのか。以下、(3)の疑問に関し、アスペクトの観点からそれぞれの動詞の特徴を見してみる。

まず、アスペクト性を持っている動詞について考える。奥田(1978)では、アスペクト体系のある動詞において、〈主体の動作〉か〈主体の変化〉かという意味特徴で、「動

作動詞」及び「結果（変化）動詞」に分類している。工藤（1995）も奥田に従い、動詞に〈動作〉か〈変化〉かという観点と、〈主体〉か〈客体〉かという観点を組み合わせて動詞を分類している。金水（2000：23）では、次のように述べている。

- (16) 継続相の「シテイル」は、〈進行〉または〈結果〉の意味を表わすが、なぜこの2つであるかという点、運動にとってその過程または結果変化がもっとも特徴のある目立つ段階であるからと考えられる。すなわち、主体が活動している最中の段階か、運動が達成されてその結果が現れた段階かのどちらかが、その動詞が表わす出来事をもっとも強く特徴づけるのである。では、なぜ動詞によって〈進行〉または〈結果〉に分かれるかと言えば、個々の動詞が表わす出来事の特徴として、過程と結果状態のどちらがより鮮明に捉えられるかという点での相違として現れるのではないかと仮定できる。

金水（2000：18-19）では、次の(17)と(18)のようなテストを挙げ、ある動詞が表わす運動に過程または結果状態があるかどうか、すなわち、動作動詞か変化動詞か、ということ判断することができるとしている（(17)と(18)のA、Bは動詞を示す）。

- (17) ついさっきAたので、当然今Aしている。
(18) 今、Bしている最中だ。

(17)、(18)のテストについて、金水（2000：18-19）では、ある動詞に対し、(17)の文に入れると自然になる場合、その動詞が結果の状態を表わす動詞であり、(18)の文に入れると自然になる場合、その動詞が動作の過程を表わす動詞である、と説明している。ところが、動詞が動作か結果かのどちらかをより鮮明に捉えることについて、例外がある。例えば、金水（2000：24）では、「太る、痩せる、増える、減る、伸びる、縮む」などのような漸進的な量の増減を表わす二側面動詞（奥田(1978)）が挙げられている。これらの動詞は、出来事によって〈進行〉も〈結果〉も表わせる場合がある。また、金水（2000：25）では、弱運動動詞と呼ばれる「止まる、消える、光る、消える、鳴る、咲く」などのような動詞が表わす出来事について、〈進行〉とも〈結果〉とも解釈できるような場合があると指摘している。さらに、森山(1988)、工藤(1995)で再帰動詞と呼ばれる「着る」のような動詞は、二側面動詞と異なっているが、〈結果〉と〈進行〉の両方を表わすことができる。最後に、本稿では、漢語のサ変動詞や様態副詞が付いている動詞のような瞬時性動詞は「様態・付帯状況」の複合動詞のV1とV2にはなりにくいいため、検討の対象から外すことにしたが、漢語のサ変動詞である「暴発する」や様態副詞が付いている「ちらっと見る」などのような瞬時性動詞（金水(2000：20)）は、〈結果〉と〈進行〉の両方を表わすことができない。このように、動作の進行を表わすか、それ

とも結果を表わすか、という視点から(9)の動詞について考察する。

まず、移動動詞について考えてみよう。(非直示的)方向性を包入した動詞は「シテイル」の形を取ると、動作の進行を表わす場合もあるし、結果を表わす場合もある。

- (19)(i) ??ついさっき太郎が階段を上がったので、当然今太郎は階段を上がっている。
- (ii) 今、太郎が階段を上がっている最中だ。
- (20)(i) ついさっき太郎が家に帰ったので、当然今太郎は家に帰っている。
- (ii) ??今、太郎が家に帰っている最中だ。(cf. 今、太郎が家に帰る途中だ。)

「上がる、登る、降りる」などのような動詞は動作を表わすが、「帰る、戻る、落ちる」などのような動詞は変化を表わす。経路位置関係を包入した動詞も、「シテイル」の形を取ると、動作の進行を表わす場合もあるし、変化を表わす場合もある。(21)、(22)を見てみよう。

- (21)(i) ??ついさっき太郎が町を回ったので、当然今太郎は町を回っている。
- (ii) 今、太郎が町を回っている最中だ。
- (22)(i) ついさっき太郎が家を出たので、当然今太郎は家を出ている。
- (ii) ??今、太郎が家を出ている最中だ。

「通る、回る、抜ける、寄る」の場合、「シテイル」の形は動作の進行の読みになる。一方、「出る、去る」のような移動の場合は、一瞬の出来事しか捉えられない。例えば、家の中から外に出る所要時間が1時間かかるというのは到底考えにくいであるため、「シテイル」の形は結果状態を示すことしかできない。

一方、移動の様態を表わす動詞も活動動詞も「シテイル」の形を取ると、動作の進行を表わす場合しかない。(23)、(24)を見てみよう。

- (23)(i) ??ついさっき太郎が歩いたので、当然今太郎は歩いている。
- (ii) 今、太郎が歩いている最中だ。
- (24)(i) ??ついさっき太郎が遊んだので、当然今太郎が遊んでいる。
- (ii) 今、太郎が遊んでいる最中だ。

使役動詞は客体の変化結果を表わすが、「シテイル」の形を取ると、主体が行なう動作の進行を表わす。次の例を見てみよう。

- (25)(i) ??ついさっき太郎がボールを投げたので、当然今太郎がボールを投げている。
- (ii) 今、太郎がボールを投げている最中だ。
- (26)(i) ??ついさっき太郎が肉を焼いたので、当然今太郎が肉を焼いている。

(ii) 今、太郎が肉を焼いている最中だ。

最後に、変化動詞を見てみよう。「外れる、焼ける」などのような位置変化動詞及び状態変化動詞は基本的に出来事の変化を表わすものである。(27)、(28)を見てみよう。

(27)(i) ついさっきバンパーが外れたので、当然今バンパーが外れている。

(ii) ??今、バンパーが外れている最中だ。

(28)(i) ついさっき肉が焼けたので、当然今肉が焼けている。

(ii) ??今、肉が焼けている最中だ。

アスペクトを持っている動詞の中で、動作を表わす動詞は(29)、変化を表わす動詞は(30)、主体が行なう動作及び客体の変化結果を表わす動詞は(31)のようなものがある。

(29)(i) (非直示的) 方向性を包入した動詞：登る、上がる、降りる、...

(ii) 経路位置関係を包入した動詞：通る、回る、抜ける、寄る、...

(iii) 移動の様態を表わす動詞：歩く、走る、駆ける、滑る、転がる、飛ぶ、流れる、...

(iv) 活動動詞：忍ぶ、探す、呼ぶ、歌う、持つ、連れる、尋ねる、遊ぶ、暮らす、泣く、...

(30)(i) (非直示的) 方向性を包入した動詞：落ちる、戻る、帰る、...

(ii) 経路位置関係を包入した動詞：出る、去る、...

(iii) 変化動詞：外れる、抜ける、焼ける、壊れる、...

(31) 使役動詞：上げる、焼く、切る、塗る、投げる、倒す、取る、壊す、殺す、砕く、...

次に、アスペクトを持っている動詞である V1 と V2 の中で、なぜ(10)と(13)の組み合わせが「様態・付帯状況」の複合動詞になれるかということ进行考察する。まず、(10)の組み合わせから見てみよう。(10)の動詞は動作を表わす動詞であるため、動作の経過に持続時間があると考えられる。V1 が表わす動作と V2 が表わす動作との経過の持続時間が同じであることが可能で、「様態・付帯状況」の複合動詞として認められる。例えば、(32)の「駆け上がる」を見てみよう。「ステージに上がる」の動作が継続している間に「駆ける」の動作もずっと同時に行なわれている。

(32) 青森県五所川原市の式典では、成田守市長のあいさつ中、新成人の男性 2 人が突然、ステージに駆け上がり、マヨネーズを盛った紙皿を互いの顔に投げ合った。

(成人式：混乱防止にあの手この手 知恵絞る自治体 2002.01.14 日付)

(13)の組み合わせにおけるV1とV2のうち、一方が動作を表わす動詞でもう一方が変化を表わす動詞である。(13)(i)の組み合わせを見てみよう。

- (33) 奇岩の間を水が小さな滝のように流れ落ちる闘龍灘は、古くから知られるアユの漁場。(アユ漁解禁：兵庫・滝野町の「闘龍灘」に釣りファンら 2002.05.01 日付)
- (34) (前略)... 河西和行さん(72)と妻満子さん(65)が体長60～70センチのツキノワグマに襲われた。和行さんは顔面をひっかかれて山の斜面を転がり落ち、背骨を折るなどの重傷。
(クマ出現：岐阜県神岡町跡津川の山林、山菜採りの男性重傷 2000.05.25 日付)

「落ちる、戻る、帰る」のような方向性を包入した動詞は、移動の終着地点や進行方向に向かって進行することを意味する。これらの動詞がV2になる時、移動の結果が発生するまでの間にV2の「様態・付帯状況」を示すV1の動作が同時に発生している。例えば、「(会社)に戻る、(自宅)に帰る」の場合、会社や自宅などのような場所が移動の終着地点として挙げられる。(11)の「(被害届を自宅)に持ち帰る」の場合は、自宅に到着するまで帰る途中の間はずっと被害届を持ち続ける。そして、自宅に着いた(自宅に帰った)時点で、被害届を持つという動作も同時に終了する。(33)、(34)の「流れ落ちる、転がり落ちる」の場合も、終着地点に落ちるまでの間はずっとV1の「流れる」「転がる」の動作が継続している。

- (35) (前略)... リンク周囲には観客を保護する硬質ガラスのフェンスが設けられていたが、パックはこの上を飛び越え、13歳のブリタニー・セシルちゃんの頭に当たった。
(米アイスホッケー：パックが頭に当たり 13歳の少女死亡 2002.03.20 日付)

経路位置関係を包入した動詞であるV2の場合、出来事が移動の開始時点から終着地点や進行方向に向かって移動する途中、「様態・付帯状況」を示す動作も同時に発生している。例えば、「出る、去る」の場合、家などを離れて別の場所に移動することを意味する。移動の開始地点を離れると、移動の結果が生じる。「走り去る、飛び去る、持ち去る、連れ去る」の場合、V2の主体の移動行為が発生すると同時に、V1の移動動作が発生し、そのまま継続していく。また、(35)の「飛び越える」の場合、「越える」が発生する時に「飛ぶ」の動作が同時に発生する。具体的には、越える直前から超えた直後までの間に「飛ぶ」動作が継続しているので、「越える」の「様態・付帯状況」を示す動作は「飛ぶ」であると言える。

(13)(ii)の「(客)を出迎える」のようなV1が変化を表わす動詞の組み合わせの場合

合、例えば、自宅を出た（出ている）状態が継続していると同時に、客を迎える。すなわち、「迎える」を示す「様態・付帯状況」は「出る」の結果変化状態の継続ということである。

4.2 「様態・付帯状況」の複合動詞として不適切な組み合わせ

なぜ（非直示的）方向性を包入した移動動詞がV1になれないのかを検討する。（7）（i）の「*帰り走る、*帰り歩く、*戻り歩く、*戻り走る」のような組み合わせが存在しない理由は、方向性を包入した動詞は、移動の終着地点に到着した際、その移動の結果が生じるからである。

- (36) (i) *太郎が（会社から）家に帰り歩く。
(ii) *太郎が（取引先から）会社に戻り走る。

(36)で示す「帰る」と「戻る」の移動可能範囲は「会社から家まで／取引先から会社まで」の距離である。ところが、「走る、歩く」のような単なる動作を表わす動詞は特にどこからどこまで移動するとは限らない。言い換えれば、理論上、「会社から家まで／取引先から会社まで」のような距離を越えても、「走る、歩く」のような動作が継続できる。従って、「走る、歩く」における移動時間の制限がないものの、「帰る、戻る」における移動時間の制限があると言える。「*帰り歩く、*戻り走る」のような場合、V2の「走る、歩く」の「様態・付帯状況」を示すのはV1の「帰る、戻る」であり、V2が継続する限り、V1も継続しなければならない。ところが、移動時間の制限のないV2の「様態・付帯状況」を移動時間の制限があるV1で表わすということには矛盾がある。すなわち、（非直示的）方向性を包入した移動動詞はV1になれない。これを一般化すると、V1が表わす出来事の持続時間はV2が表わす出来事によって決められる。変化動詞の場合、結果変化が生じた後、結果変化の状態が残存する（静止状態に入る）。このような結果変化は別の動作の「様態・付帯状況」にはなりにくい。例えば、「（木が）倒れ転がる」のような組み合わせはない。「倒れている状態の木が転がる」は可能であるが、「転がる」の様態は「倒れる」こと、すなわち、動的な動作の様態は静的な状態であるとは言いにくい。従って、全体的に変化動詞はV1になりにくいと言える。「浮かれている状態で歩く」を意味する「浮かれ歩く」や「酔っ払っている状態で歩く」を意味する「酔っ払い歩く」のような極少数の「変化動詞＋移動の様態を表わす移動動詞」の組み合わせ(Matsumoto(1996))は存在するが、個別的な例に過ぎないと考えるべきではないだろうか。使役動詞は変化が発生すれば、動作の持続時間の長さをV2とは関係なく自ら決めることができるから、V1としては不適切である。従って、(7)(ii)の「*焼き泣く、*塗り立つ」などのような組み合わせは不適切である。変化動詞や一部の使役動詞は一瞬のうちに結果変化が発生する出来事を表わすため、V2としても不適切である。従って、「*転がり外れる、*滑り倒れる、*(チラシを)歩き取る、*(ゴミを)走り捨てる

る」などのような組み合わせは許されない。「泣き崩れる、笑い転げる」のような組み合わせについては、「崩れるほど激しく泣く、こけるほど激しく笑う」を意味するから、主要な出来事はV2ではなく、むしろV1である方が適切だと考えるべきではないだろうか。従って、「泣き崩れる、笑い転げる」のV1は様態や付帯状況を表わしていないため、「様態・付帯状況」の複合動詞として認めがたい。また、(7)(iii)の「*泣き焼く、*立ち塗る」などのような組み合わせにおけるV1とV2の項構造は一致しない。すなわち、V2は客体(対象)を取るが、V1は客体を取らない。さらに、V2は結果変化を表わす動詞であり、単なる動作の進行を表わす動詞と違って、動作の持続時間には制限がある。従って、このような使役動詞はV2になれない。ただし、「上げる」のような少数の使役動詞は客体の結果変化が発生する前に、主体の動作の過程は一定の時間的な幅を持っているため、(37)の「持ち上げる」、(38)の「抱え上げる」(Matsumoto(1996:205-213))のような組み合わせにおけるV2になれる。この場合、V1とV2の客体は一致していなければならない。

- (37) (前略) ... 安部達雄さん(53)が土に半分埋まった不発弾らしいものを発見。手で持ち上げ、車に載せて約2キロ離れた会津若松署七日町交番に届けた。(不発弾発見:工場予定地から、男性が抱えて交番へ 福島 2001.10.06日付)
- (38) (前略) ... 秋元美穂ちゃん(7)と妹(4)の間に白い車が止まり、出てきた男がいきなり美穂ちゃんを抱え上げた。(女児連れ去り:7歳女兒が男女2人組に連れ去られる 黒磯市 2001.08.15日付)

しかし、「持ち上げる、抱え上げる」のような場合、V1が表わす出来事はV2が表わす出来事の「手段」であるという解釈も可能であるということに注意されたい。「様態・付帯状況」の複合動詞のV1とV2になれない動詞は次の(39)のようなものが挙げられる。

- (39)(i) V1: 変化動詞(「浮かれる、酔っ払う」のような一部のものを除く)、
(非直示的)方向性を包入した移動動詞、使役動詞
- (ii) V2: 変化動詞、使役動詞(「上げる」のような一部のものを除く)

次の(40)の組み合わせも「様態・付帯状況」の複合動詞として認められない。

- (40)(i) *歩き帰る、*走り帰る、...((7)(i))
(移動の様態を表わす移動動詞+(非直示的)方向性を包入した移動動詞)
- (ii) *持ち戻る、*話し帰る、*しゃべり帰る、*歌い帰る、*話し戻る、*遊び帰る、...
(移動の付帯状況を表わす活動動詞+(非直示的)方向性を包入した移動動詞)
- (iii) *持ち走る、*連れ走る、*語り歩く、*しゃべり歩く、*語り走る、*歌い走

る、...

(移動の付帯状況を表わす活動動詞+移動の様態を表わす移動動詞)

(iv) *語り泣く、*しゃべり泣く、...((7)(ii))

(活動動詞+活動動詞)

まず、「移動の様態を表わす移動動詞+(非直示的)方向性を包入した移動動詞」である「駆け登る、駆け上がる」と(40)(i)の「*歩き帰る、*走り帰る」との違いを見てみよう。

- | | |
|----------------------|-----------------|
| (41)(i) 太郎が坂道を駆け登る。 | [坂道を駆ける、坂道を登る] |
| (i)' *太郎が家に歩き帰る。 | [*家に歩く、家に帰る] |
| (ii) 太郎が階段を駆け上がる。 | [階段を駆ける、階段を上がる] |
| (ii)' *太郎が自宅に走り帰る。 | [*自宅に走る、自宅に帰る] |
| (iii) 太郎がお弁当を家に持ち帰る。 | [お弁当を持つ、家に帰る] |

(41)(i)と(ii)の「駆け登る、駆け上がる」の場合、「駆ける、登る、上がる」は全部助詞「を」と共起することができる。すなわち、移動を示すV1とV2は同じ助詞を取ることが可能である。ところが、(41)(i)'と(ii)'の「*歩き帰る、*走り帰る」の場合、「帰る」は助詞「に」と共起することができるが、「歩く、走る」は「に」と共起することができない。すなわち、V1が取る助詞はV2に引き継がれることができないため、V1とV2との複合が助詞の引き継ぎの問題によって阻止される。従って、(40)(i)は「様態・付帯状況」の複合動詞として認められない。一方、「持ち帰る、持ち去る」などのような場合、V2は移動を示す動詞であるが、V1は移動を示さない動詞である。V1とV2はそれぞれ別々の助詞を取っても前述の助詞における引き継ぎの問題が発生しない((41)(iii))。また、「持ち歩く、持ち帰る」は言えるが、現実的に発生することが可能である出来事を表わす、例えば、(40)(ii)、(iii)、(iv)のような組み合わせは「様態・付帯状況」の複合動詞として認められにくい。(42)を見てみよう。

- | |
|------------------------------|
| (42)(i) *太郎が新商品の見本を会社に持ち戻った。 |
| (ii) *太郎が昨日同僚と会社にしゃべり戻った。 |
| (iii) *太郎が昨日歌を歌い帰った。 |
| (iv) *太郎が昨日急いで重要な書類を持ち走った。 |

現実世界では可能な出来事がたくさんあるが、すべて語彙化するのはやはり難しい。どこまで語彙的なレベルで表現できるか、という問題は言語使用者の慣習に委ねるしかないのではないか。影山(1993:120-121)では、次のような指摘がある。

- (43) (前略)非能格+非能格の複合動詞では動作主が2つの異なる動作を一体化して行なうことになってしまうが、そのようなことは現実問題として困難である。歩きながら考えるとか座ったまま寝るというのは可能であるが、「*歩き考える、*座り寝る」という複合動詞で表わさねばならない程度にまで慣習化された動作とは考えられない。

最後に、(14)のようなアスペクト性を持っていない単なる状態を表わす動詞がV1になる組み合わせについて考える。「様態・付帯状況」の複合動詞のV1にはなれるが、V2にはなれない動詞、「居る」などのような「状態動詞」がある。なぜ、「居る」のような「状態動詞」はV2になれないのだろうか。影山(1999:71)では、「状態動詞」は、定義上いつ始まり、いつ終わるという時間を超越した概念を表すから、進行形の働きとは相容れないと指摘している。状態動詞であるV1が表わす動作の開始時間も経過時間も明確に示されていない。仮に「状態動詞」をV2にすれば、V1とV2が表わす出来事が同時に継続することに基づいて、V1も「状態動詞」でなければならない。しかしながら、「*ありいる」や「*居ある」や「*できいる」などのようなもののV1は、V2が表わす出来事の様態や付帯状況を示すことができないと考えられる。「状態動詞+状態動詞」である「様態・付帯状況」の複合動詞はあまり存在しない。むしろ、三原(1997)の指摘通り、「いる」や「ある」などのようなものは、「ている」や「てある」のような文法的アスペクトとして存在する。三原(1997:110)では、文法的アスペクトとは、「イル」などが本来の意味を(部分的に)失い、形式動詞となることによって、相を表わす表現としての機能を担うようになるものである、と述べている。従って、「状態動詞」はV2になれない。

一方、V1が「状態動詞」である「様態・付帯状況」の複合動詞は、基本的に「居座る、居並ぶ、居竦まる、居残る」などのようなごく少数の例しか存在していない。

- (44) 民主党の直嶋正行参院国対委員長は趣旨説明で「森首相が実質上の辞任を表明した以上、首相が国会審議に責任を持ち得ないことは明らかで、死に体の首相が居座ることは外交をはじめ国益を損なう」などと即時退陣を求めた。
(首相問責決議案：与党3党などの反対多数で否決 参院 2001.03.14日付)
- (45) 副農相をはじめ農水省幹部らが居並ぶ同省7階講堂に、約150人の組合員が詰め掛ける異例の要請行動。
(有明海ノリ不漁：水門開放求め漁民270人が霞が関でデモ 2001.03.01日付)

例えば、(44)の「居座る」の場合、「座る」という動作が継続する限り、「居る」という動作は終了しない。ところが、なぜアスペクト性を持っていない「状態動詞」である「居る」がアスペクト性を持っている動詞「座る」と複合できるか、ということに関しては

まだ有力な説明ができないため、今後の課題としたい。

5 まとめ

本稿は、「様態・付帯状況」の複合動詞の組み合わせ及び V1、V2 になれる動詞の主な特徴を検討した。動詞が持つ意味的な側面を考察した結果、「歩く、走る、探す」などのような動作も、「帰る、落ちる、去る」などのような移動における結果の変化を示す動詞も V1、V2 になれることが分かった。ところが、基本的に「倒れる、焼ける、倒す、焼く」などのような位置的や状態的な変化を表わす動詞は出来事の発生における時間制限があるということから、「様態・付帯状況」の複合動詞の V1 と V2 にはふさわしいものではないようである。

今後の課題としては、「様態・付帯状況」以外の語彙的複合動詞の全体に対し、適切な組み合わせにおける V1、V2 及びそれらの意味的な特徴について引き続き検討することが残されている。

注 移動動詞における方向性を包摂した動詞の中では、直示的方向性を表わす動詞と非直示的方向性を表わす動詞がある。直示的方向性を表わす動詞は、「行く」、「来る」のような動詞である。松本 (1997: 146) では、次のように述べている。

直示的方向性を表わす「行く」「来る」は現代語では複合動詞後項にならないが、古語(文語)では後項動詞として「渡り行く」「過ぎ行く」「去り行く」「走り来る」のように、経路位置関係、様態の移動動詞を前項動詞として複合化する。

参考文献

- 奥田靖雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって—金田一の段階—」宮城教育大学『国語国文』8(奥田靖雄 (1985) 「アスペクトの研究をめぐって—金田一の段階—」『ことばの研究・序説』 pp. 85-104、むぎ書房 再録)
- 奥田靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐって(上)・(下)」『教育国語』53、pp. 33-44、『教育国語』54、pp. 14-27、むぎ書房。
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房。
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版。
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』日英語比較選書 8、中右 実 編、研究社出版。
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』日英語対照による英語学演習シリーズ 2、くろしお出版。
- 影山太郎 (2001) 「動詞研究の現在」(序章)、「自動詞と他動詞の交替」(第 1 章)、『日英対照 動詞の意味と構文』影山太郎 編、pp. 3-39、大修館書店。
- 金水 敏 (2000) 「時の表現」(第 1 章)、『時・否定と取り立て』日本語の文法 2、金水 敏・工藤真由美・沼田善子 著、仁田義雄・益岡隆志 編集、pp. 1-92、岩波書店。
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房。
- Matsumoto, Yo (1996) *Complex Predicates in Japanese, A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'* CSLI Publications.
- 松本 曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」(第 II 部)、『空間と移動の表現』(田中茂範・松本 曜 著) 日英語比較選書 6、中右 実編、pp. 126-230 研究社出版。
- 松本 曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114 号、pp. 37-83。
- 三原健一 (1997) 「動詞のアスペクト構造」(第 II 部)、『ヴォイスとアスペクト』(鷲尾龍一・三原健一 著) 日英語比較選書 7、中右 実 編、pp. 107-186、研究社出版。

森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院.

由本陽子 (1996) 「語形成と語彙概念構造—日本語の「動詞+動詞」の複合語形成について—」『言語と文化の諸相』 pp. 105-118、英宝社.

例文出典

毎日新聞インターネット記事(アドレスは：<http://www.mainichi.co.jp/> 検索時期は 2002 年 5 月である。)

出典が示されていないものは、作例である。

(カ シメイ 筑波大学大学院博士課程 文芸・言語研究科 応用言語学)